

# 漢語副詞「営々と」の意義変遷

— 〈継続〉を示す意味の成立をめぐる—

陳 贇

On the Meaning Change of the *Kango* Adverb *Eiei to* (営々と)

CHEN Yun

The *Kango* (kanji-based) loanword “Eiei” was a word that, in the original Chinese, had a negative connotation and meant “continuously coming and going”. But when it was accepted into Japanese, it became a term with the positive connotation in its use chiefly as an adverb. At that time, it can be thought that the change in the usage and style from “Eiei to shite” to “Eiei to” also played a role. It can be thought that the meaning of “continually” that is generated in that meaning of the word was also behind such a semantic change. Moreover, it can be considered that, as a result of *Eiei* (営々) acquiring the meaning of “continually”, it became synonymous with its homonym, the “eiei” (永々) used from old, and, consequently, “eiei” (永々) became subsumed and absorbed into *Eiei* (営々), thus resulting in a substitution of those words.

キーワード：疊字形漢語副詞, 評価性, 同音語の交替, 近現代日本語, 漢語と和語

## はじめに

近年、漢語副詞「営々（と）」には、「営々と続いてきたもの（＝談合筆者注）を根絶するというのは本当に勇気が要る大変な仕事だ」〈衆議院国土交通委員会2号 2006.02.24〉というように、継続する期間の長さを表現する場合に使用される例が目立つようになっている。周知のように、現代日本語の文脈では、「営々（と）」（以下（ ）省略）には、「一生懸命〈働く〉」という意味しか認められておらず、本来なら、「営々と働く」、「営々と努力する」といった〈根気強く、こつこつと何かをする〉意味が一般的に行われるはずであり、冒頭に掲げた「続く」のような評価を伴わない動詞との共起は考えにくいものである。とはいうものの、実際問題として、「営々と」が時間的持続性のみを表現する例が数多く確認できるようになっていることは事実である。そこで、本稿では、「営々と」の中国語における原義に遡り、その出自と従来の意味を踏まえた上で、近現代日本語の文脈における〈勤勉さ〉から〈継続〉の意へと発展していった過程を追い、漢語副詞の語義変化のあり方を探ってみたい。その際、同じく漢語出自の「永々」との相関関係も視野に入れて論証を行う。

## 一 文献に見られる「營營（營營）」の使用状況

## 一一 1 『漢語大詞典』における語釈および古代中国語における使用状況

「營營」①象声詞。『詩・小雅・青蠅』：「營營青蠅，止於樊。：朱熹集傳：「營營，往来飛聲，乱人聽也。」宋歐陽修『和聖俞聚蚊』：“群飛豈能数，但厭声營營。”明徐渭『涉江賦』：“彼營營之微声，沾沾之細利，……”柔石『人間雜記・死所的選択』：“都是些善男信女，營營地在談論他。”②往来不絶貌；往来盤旋貌。『楚辭・九章・抽思』：“願徑逝而未得兮，魂識路之營營。”王逸注：“精靈主行，往来数也。”『漢書・揚雄傳上』：“羽騎營營，分殊事。”顏師古注：“營營，周旋貌也。”〈以下の用例省略〉③勞而不知休息；忙碌。『莊子・庚桑楚』：“全汝形，抱汝生，無使汝思慮營營。”鐘泰發微：“營營，勞而不知休息貌。”宋範仲淹『与韓魏公書』：“吾輩須日夜營營，以備将来。”魯迅『墳・摩羅詩力說』：“創痛少去，即復營營於治生，活身是凶。”引申為鑽營追逐。陳毅『湖海詩社開征引』：“一生營營者，個人利録累。”④紛乱錯雜貌。北周蕭大圓『言志』：“万物營營，靡存其意，天道昧昧，安可問哉？”『統資治通鑑・宋神宗熙寧三年』：“我豈拒諫者！但邪說營營，顧無足聽。”〈以下の用例省略〉⑤形容内心焦燥不安。唐張九齡『上封事』：“欲利之心，日夜營營”。元趙孟頫『題耕織圖二十四首奉懿旨撰』之九：“小人好爭利，昼夜心營營。”清蒲松齡『聊齋志異・阿織』：“中心營營，寢食都廢”

下線を付した意味記述は「①擬声語」，「②絶えず行き来する様子」，「③休まずに劳作する，忙しい様子」，「④乱雑な様子」，「⑤内心がいらいらして落ち着かない様子」というものである。そのほかにも，③の解釈にあたるものに，

○嘉熙三年（1239），臣僚言：「（前略）販夫販婦所資錐刀以營斗升者，亦皆以官価強取之。終日營營，而錢本俱成乾沒。商旅不行，衣食路絶。〈行政を司る政府が〉その日の生活のためにあくせく働く商人に官が定めた価格で強引に取引を強い，その商人たちをして元金まで失わせしめる。そのため，商業が行われず，衣食を得る手だても失ってしまう。日本語訳は筆者による。以下同。〉（『宋史』志・卷一百八十六・志第一百三十九・食貨下八・市易）

という例があり，⑤にあたるものに，

○又有營營終日，專務納交，書幣往来，道路旁午，而妄希昇進者矣。〈また終日營々とし，専ら納交〈自分より地位が上の人に賄賂を渡したりすることを指す〉に務め，昇進を企む人あり。〉（『宋史』列伝・卷四百一十五・列伝第一百七十四・葛洪）

などの例が挙げられるが，清朝以降になると，

○今書院止知有膏火獎賞，而不思所以設膏火獎賞之義。營營逐逐。豈非象山之所深責哉。（盛康『皇朝經世文統編』卷四・學術四法語。勸士条約・李棠階）

○若得一青衿，視同極品，自雄鄉里，營營錙銖，陋哉。（饒玉成『皇朝經世文統編』卷三・學術三法語・〈輶軒語節・張之洞〉）

○營營名利窟，私欲羞難量。（『台湾方志』一二一・統修台湾府志・卷二十六・芸文（七）・詩（四）露香亭即事）

などのように，〈名・利を追い求める〉という意味が中心になる。

一方，以下に示す『台湾文献叢刊』（清末）所収「台風雜記」にあるような，上掲例とはニュアンス

が異なるものも認められる。

○蓋男子營營励生業，婦女則裁衣，飲食，細心經理。〈蓋し男子は営々として生業に励む，婦女は裁縫，飲食など，家計に勤しむ〉（「男女有別」篇）

この例を見る限り，「営営」が〈勤勉さ〉を想起させるニュアンスを併せ持つ語のように思われる。しかしながら，下記の『華英辞典』の記述からも明らかなように，「営営」は本来，マイナスイメージの語であったのである。

○營營 going to and fro, to travail in, as a peddler; buzzing, flitting, as flies. (Williams, S.W.: *A Syllabic Dictionary of the Chinese Language*. 1<sup>st</sup> ed. 1874)

○營營逐逐 buzzing about; restless; the turmoil of life. (Giles, H.A.: *A Chinese-English Dictionary*. 1<sup>st</sup> ed. 1892)

○營營 going to and fro; restless. (Baller, F.W.: *An Analytical Chinese-English Dictionary*. 1<sup>st</sup> ed. 1900)

なお，Stent, G.C.: *A Chinese and English Vocabulary in the Pekinese Dialect*. 1st ed. (1871) および 3rd ed. (1898) には登録が見られなかった。これはこの辞書が主に小説類に見られる俗語や口語を対象に語彙を採集したものであり<sup>1)</sup>，そのために文語的な「営営」が採られなかったのではないかと考えられる。

## ―― 2 『漢語大詞典』の語釈に対する疑問及び現代中国語における「営営」の使用状況

ところで，『漢語大詞典』の③と⑤の語釈についてはもう少し議論の余地があるように思われる。例えば，③の用例に「全汝形，抱汝生，無使汝思慮營營」（『莊子・庚桑楚』）が挙げられているが，これに対し，享祿年間の『莊子抄』<sup>2)</sup>には，

○不逐物境，全形者也。守其分内，抱生者也。思量シテ心ヲヨコヘヤルベカラズ。（四25オ）

と解釈される。また，新釈漢文大系『莊子』の注にも，「お前の身体を全くし，生命を安んじ保ち，あくせくと思慮をめぐらさなければよい」（p.606）とあり，いずれも，⑤の〈内心がいらいらして落ち着かない様子〉と合致するものである。一方，同じく③の用例に選ばれている宋の範仲淹『与韓魏公書』にある「吾輩須日夜營營，以備将来」の場合は，「将来に備えるために，われわれは日夜営営とせねばならぬ」という肯定的なニュアンスが読み取れるのである。このように，『漢語大詞典』における語釈と用例の妥当性についてまだ議論する余地があるように思われる。また，このような不適切な解釈を行ってしまったのも，下記に述べるような，現代中国語での「営営」使用の少なさに原因の一端があるのではないかと考えられる。

管見の範囲では，現代中国語における「営営」単独の使用例としては，次の，

○魯迅在『戰士と蒼蠅』中作過類似的描述：“戰士戰死了的時候，蒼蠅們所首先發見的是他的缺點和傷痕，囁着，營營地叫着，以為得意，以為比死了的戰士更英雄。〈戰士が戦死したら，蠅が真っ先に見つ

1) Stent (1871) の序文，および伊地知善繼「英語による中国語辞典」（中国語研究会編『中国語学事典』1958年），那須雅之「G.C.Stentとその著書について」（『中国語学』240，1993年）を参照。

2) 『続抄物資料集成』第七卷所収本による（濁点，句読点は筆者）。

けるのは戦士の欠点と傷跡であり、そこにしゃぶりつき、営営と鳴き続ける。) (徐懐謙「魯迅的熱鬧及其它」人民日報 2001.09.25)

という例<sup>3)</sup> が得られたのみであった。ここの「営営」は『詩経』の原義に基づくものであるが、現行の主な中国辞書<sup>4)</sup> には収録されていない。また、『中日大辞典』(愛知大学編, 増訂第二版 1999年)には、

○営営(営営) 利を求めてあくせくするさま。

と挙げられてはいるものの、用例にはこの語釈と合致しない「～～青蝇(蝇)」しか挙げられていないことや、これが見出しではなく、「営(営)」の語釈の一つに割り当てられているに過ぎないことから、現代中国語としては、それほど認知度の高い熟語ではないことが看取される。ただ、この辞典の説明からも、「営営」の持つ比較的マイナスのイメージは顕著に見て取れる。「営営」が余り一般的でない語ということは、『漢語大詞典』に、

○「営営苟苟」形容人不顧廉恥，到处鑽營。李大釗『現在與未来』：「就是那最時髦的政客，成日營營苟苟，忙個不了…」〈「営営苟苟」廉恥を省みず，あちらこちら付け入って利を得る人。〉

○「営営逐逐」①忙忙碌碌。明宋濂『抱瓮子伝』：「夫子恒營營逐逐於一甕間，無乃自苦乎？」『金瓶梅詞話』第一回：「单道世上人，營營逐逐，急急巴巴，跳不出七情六欲関頭，打不破酒色財氣圈子。」

②競相追逐。梁啓超『中国積弱遡源論』第三節：「群蟻營營逐逐，以企仰此無量之光荣，莫肯讓也。」邹韜奮『患難余生記』第二章：「当時政界中人兼營商業以增加收入的頗多，即使是中小公務員無力独營，也多營營逐逐合力而經之營之。」〈①は「いそがしい様子」，②は「競い合う」〉

と四字熟語形式の使用事例のみが掲載されていることからもうかがわれる。さらに、ここで注意すべきなのは、二重下線を付した著者がいずれも1941年以前に物故している人物で、それ以降のものが挙げられていない<sup>5)</sup> ことである。それに加え、前出「営営」の単独使用例は1936年没の魯迅によるものであり、これらの一連の事実を考え合わせると、「営営」は、1940年代以降の現代中国語における認知度は極めて低いものとみてよさそうである。

## 二 日本語に見られる「営営」の使用状況

### 二-1 古代日本語における実態

古代日本語における「営営」の使用に関し、先ず漢語使用の可能性が高い東京大学史料編纂所所蔵の古記録古文書に焦点を当て調査したが、結果として「営営」は下記の1例しか見出せなかった<sup>6)</sup>。

○著諒服闇之服云々，然者營營之間，国司参社之時，(『吉部密訓抄五』卷二：建久三(1192)年8月23日)  
また、国文学研究資料館によるデータベース化された日本古典文学大系および断本大系に収録されている文学作品においても、下記の①～⑨までの『日本国語大辞典』(二版)の掲出例と重複するもの

3) 用例の検索には「関西大学現代漢語語料庫」を使用した。

4) 『現代漢語詞典』(第五版, 商務印書館 2005年), 『現代漢語双序詞語匯編』(武漢大学出版社 2003年)等を参照。

5) 李大釗は1927年, 邹韜奮は1944年死去。

6) 『小右記』卷六・治安三(1023)年11月21日の条にも、「而從府令出立云々，依營營事所仰遣也」とあるが、二つ目の「營」をミセケチして右側に「其」と訂正してあり、「営営」の確例には数えられない。

外には、「營々（営営）」という疊語での使用例を見出すことができなかった。

- ① 營營染白黒，讚毀織災殃（『性靈集』一「遊山慕仙詩」835年頃）
- ② 樵翁莫笑歸家客，王事營々罷不能（『菅家本草』五「遊竜門寺」900年頃）
- ③ 燈滅異膏煎，苟可營々止（『菅家後集』「叙意一百韻」903年頃）
- ④ 「法皇渡御花山院大納言五条亭，即可為御所云々，營々莫大歟」（『玉葉』文治四年六月一六日，1188年）
- ⑤ 「雖然士人馳騁官途商賈奔走市衢農工營營耕役之間，何遑緜充棟五車之書味繭糸牛毛之理也乎」（『彝倫抄』跋，1640年）
- ⑥ 「營々 エイエイ 往来兒」（『合類節用集』八，1680年）
- ⑦ 「桑土綢繆歲月長，營營恰似築城牆」（『玩鷗先生詠物百首』・蜂巢，1783年）
- ⑧ 「齧人不知厭，營營翻西東」（『詩聖堂詩集』二編・七・秋蚊，1828年）
- ⑨ 「笑他人世裡，鵬鷄共營營」（『黃葉夕陽邨舍詩－遺稿』三・病中雜詩五首，1832年）

一見して分かるように、用例はもっぱら漢文脈や漢詩類のもので、そのうち①は『北史』列伝・陽尼・從孫固「巧佞巧佞，讒言興兮。營營習習，似青蠅兮。以白為黒，在汝口兮」に典拠を持つものであるし、④の「營營莫大」という使い方は、おそらく、『魏書』（列伝・卷七十三・崔延伯）の「習習宰嚭，營營無極」に出典を求められるものであろう。そのほかの用例は、およそ〈いそがしい様子〉、〈（利を求めて）あくせくする〉の域を出ない。一方、筆者による古辞書や節用集類の調査では、上記⑥の『合類節用集』以外には、『伊呂波字類抄』<sup>7)</sup>への登録が確認できたのみであった。さらに、中世の『日葡辞書』や幕末明治期の『和英語林集成』など外国人の手になる辞書、あるいは『言海』、『ことばの泉』など初期の近代国語辞典類にも登録されていなかった。なお、明治期の漢語辞書類<sup>8)</sup>には、「营造」、「營業」、「營建」などの「營-」で始まる熟語が登録されているものがきわめて多いにもかかわらず、「營營」を収録しているものは皆無であった。

このように、近世以前の日本語、特に和文脈における「營々（営営）」の使用はきわめて限られた範囲でしかなく、一般的に広まった様子は認められなかった。

## 二-2 明治後期～昭和前期の辞書記載

前述のように、明治期以前の文学作品や辞書類には、「營營」の登録がきわめて稀なものであった。しかし大正期～昭和前期の漢和辞書には、少数ながらその例を確認できる。

- ① 後藤朝太郎他『音引漢和大辞典』（1911年）
 

【營營】 エイエイ ①ゆきかよふ。飛びかふ〔出処〕詩経に「營々たる青蠅」 ②せつせとはたらくこと。いそしむ有様〔出処〕趙孟頫の詩に「小人は好んで私を争ひ，昼夜心營々たり」。
- ② 服部宇之吉・小柳司気太『改訂詳解漢和大字典』（1916年）
 

【營營】 エイエイ ①往来するさま。〔詩経小雅青蠅「——青蠅」 ②転じてあくせくして利を求めらるさま。〔庾信，連珠〕

7) 卷七〈江・重点〉部に「營々 エイク」とある。

8) 『明治期漢語辞書大系』所収本を調査した。

以後、②の影響を受けてか、簡野道明『字源』(1925年)、小柳司気太『新修漢和大字典』(1932年)、『芳賀漢和新大辞典』(1933年)に同様の語釈が施されている。

ここでは、①に「いそしむ」というプラス評価の言葉が使用されているほかは、「利を求める」意の語釈がほとんどである。

一方、同時期の和英辞典類においては、「営々」は「働く」と共起し、〈精力的に (Strenuously)〉、〈熱心に (zealously)〉などの意とするものが多く見られる。

○Eiei, えいえい, 營々, *a. and adv.* Strenuously; with earnest efforts; zealously; strivingly; struggling; ardent. Syn. SEKUSEKU. (プリンクリー他『和英大辞典』1896年)

○Eiei (營々), *ad.* Strenuously; earnestly. 終日營々と働いてゐる。He works strenuously all day. (井上十吉『新訳英和辞典』1909年)

○eiei (營々). *ad.* sten'uously; ea'gerly; tire'lessly; ar'dently; in ear'nest. ¶ 營々として働く *to toil and moil*. 蜜蜂が營々として働いてゐる。The bees are toiling tire'lessly. (武信由太郎『武信和英大辞典』1918年)

○eiei<sup>3</sup> (營々 [エイエイ]), *ad.* strenuously; earnestly. ⇨ *akuseku* (齷齪). — 營々として働く, *to drudge at; toil and moil*. 毎日毎日營々齷齪しても一文も残らない。Though I work with all my might day after day, I cannot save a penny. (井上十吉『井上和英大辞典』1920年)

○eiei (營々) *adv.* hard; strenuously; indefatigably; tirelessly. ⇨ *shishi* (孜孜) 参照。Cはその日は營々として働いてゐた Cassie toiled *hard* that day. — *Munsey*. (竹原常太『スタンダード和英大辞典』1924年)

○Eiei (營々) 【副】 Strenuously. ●營々として働く *to drudge — fag — toil and moil*. (齋藤秀三郎『齋藤和英大辞典』1928年)

上記のものからは、〈行き来するさま〉などといった中国古典による語釈が一切見当たらず、生活のためといった目標の下で〈熱心に働いている〉ことだけ強調されていることが看取される。これは、おそらく和英辞典が時代の現状に密着した、実用性を求める性格を持っているからであろう。

### 三 明治期から戦前までにおける「営々」の語義と形態の変化

#### 三-1 明治期の使用実態 — マイナス評価とプラス評価の共存

明治期から大正期にかけての文献に見られる「営営」の用例には、

○嗟吁人生の短期なる、昨日の紅顔今日の白頭。忙々促々として眼前の事に營々たるもの、悠々綽々として千載の事を慮るもの、同じく之れ大暮の同寝。(北村透谷『富嶽の詩神を思ふ』1893年)

○夫れ斯の如く兩者營々として自家の利のみを窮追し、東方の別人種、鐵火を轉ばして域内の山川を坦にし、歐洲の風物は氾濫せる蒙古潮流中に漂蕩せるを知らず。(藤田精一「蒙古大王拔都の西歐侵掠」(下)『太陽』1895年08号)

○(前略) 知らず又新會の徒、何を苦んで此迷擧に出で、營々として俗流を追ふの急なる。(浅田江村「政治の大墮落」『太陽』1909年05号)

○全体世の中の人、道とか宗教とかいうものに対する態度に三通りある。自分の職業に気を取られて、ただ營々<sup>えきえき</sup>役々と年月を送っている人は、道というものを顧みない。（森鷗外『寒山拾得』1916年）  
 というように、「私利私益を求め、目の前のことばかりに捉われる、その日の生活のためにあくせくする」といった中国語の派生義に沿った用法のものが見られる一方、下記のような例もある。

○彼等は、（中略）草を刈るもの、田を耕すもの、馬に秣ふもの、鶏を畜ふもの、器具を造るもの、牛乳を搾るもの、終日營々として倦むことを知らず、自から耕して食ひ、自から織りて衣、止むを得ざるもの、外は一物をも他に仰がず、（金山尚志「北海道に於ける無言の行者」『太陽』1901年04号）

○彼等が、（中略）一時間たりとも空費せず、其心は常に高尚なる觀念に奪はれて、一犁一鋤苟くもせず、終日營々として他念なき有様は、一見自から尋常の農夫にあらざるを知らる、（金山尚志「北海道に於ける無言の行者」（承前）『太陽』1901年07号）

○彼れはその種族の維持の爲めに、その生存の繼續の爲に營々として終日憂勞するにあらずや。（樋口龍峽「美的生活論を讀んで樗牛子に與ふ」『太陽』1901年07号）

○我国食糧品殊に米価の昂騰は免れざるの事情にあるものと言わざるべからざるに今や幸に農民子弟の都会生活難の実験より浮華的非望を去って着実なる父祖の～に營々努力するの傾向となり（「米価と生産費・利益過ぎる農業」『大阪新報』1912年〔日付不明〕 \*「～」部分は判読不能。）

○然れども濠洲連邦政府は多年營々として此適否問題の解決を期せんと欲し多大の試験を行い来りつつあり。（「白人濠洲主義とダ伯・下」『大阪毎日新聞』1912.05.06）

○彼等は金を持っている商人だけに目高い營々として金の蓄積に余念がない生活程度の質素なるもこれが為である。（「驚歎すべき大阪市外の膨張：十年間に八九倍の発達」『報知新聞』1912.08.07）

これらの用例では、「營々として何かをしている」人を積極的に評価していることがわかる。およそのあたりから、「営営」に〈国のため、あるいは個人の信念に基づいて自ら進んで労作する〉というイメージが付随するようになって見てよいだろう。

### 三ー２ 近代日本語における「營々」に見られるプラスの評価性

大正から昭和戦前期にかけても、「營々と」は、プラス・マイナスの両方の評価を伴って用いられている。マイナス評価の例としては、

○商人如何に射利に營々たりと雖も一時の小利を以て華客を失うが如き愚を為さんや（「輸出織物改良策」時事新報 1912.11.10）

○世界をして恰も火山脈の上に座すると同一の思あらしめ常に營々として防禦態度に齷齪たらしむる原因は那邊に存するや（「国際関係と銀行業・一」『中外商業新報』1912.12.26）

○すぐれた絵や彫刻により、また建築あるいは家具装飾の高雅な趣味によって情操を養われ、洗練されれば、營々としてやむことなき生活戦線に疲れた時でも、機械化した工場に働く中でもどことなく心に余裕を保ち、（相馬愛蔵・相馬黒光『一商人として ― 所信と体験 ―』1938年）

などがあげられる。しかしながら、見立つのはむしろ次に掲げるようなプラスの評価性を伴う例である。

○今や幸に農民子弟の都会生活難の実験より浮華的非望を去って着実なる父祖の様に營々努力するの傾向となり。（「米価と生産費」『大阪新報』1912年〔日付不明〕）

- 全国幾十の造船所が孰れも職工の数を増し日夜其業務に營々たる状態に在り（『米国造船業の盛況』『大阪毎日新聞』1917.03.04）
- 硝子製造国たる白耳義の惨害は思い半ばに過ぎるものあらん更に今次大戦に伴う死傷者多数に上れるを以て觀れば白国の如き如何に産業の恢復に孜々營々とするも労働者の補給に一大障碍横わるものありと云う可し。（『硝子業無影響・白耳義恢復遅延』『時事新報』1918.11.19）
- 營々たる人類の進歩のための努力の結果は、将来、婦人の生活により多くの人間性と文化とを与え、子供らのための文学の創造者も輩出するであろう。（宮本百合子『子供のために書く母たち —「村の月夜」にふれつつ—』1937年）
- 一回の大地震でそれまで營營と築いて来た文化は一朝にして潰れてしまうのです。（横光利一『厨房地日記』1937年）

総じて言えば、明治後期から「營々」の使用頻度が徐々に高くなり、それに伴って、〈あくせく〉から〈こつこつ〉というニュアンスへと移行したようである。そして、戦前までは〈あくせく〉と〈こつこつ〉の意が入り乱れて用いられながらも、緩やかに後者のほうが勢力を拡大していく様相を呈している。なお、「こつこつと勤勉に何かをする」意に一般的にまつわる〈長い期間にわたって〉というイメージが少しずつ付着しはじめ、後述するように、戦後に入ると、〈期間〉の意味だけが中心的なものになっていくのである。

### 三一 三 長期間を示す語との共起

およそ明治後期から、「營々」はまた、「多年」「～年間」などといった長時間の概念を表す語句と共起するようになるが、その例はおおよそ明治後期から見られるようになる。

- 濠洲連邦政府は多年營々として此適否問題（白人が永続的に熱帯地方の労働に堪え得べしかの問題 — 筆者注）の解決を期せんと欲し多大の試験を行ひ来りつつあり（『白人濠洲主義とダ伯・下』『大阪毎日新聞』1912.05.06）
- 二十七年間營々として働いて剩す処僅に三千元、其の額の余りに尠いのを嗤ふこと勿れ。（『憂うべき禍根の萌し（二）』『神戸又新日報』1921.10.18）
- （三井物産が）中小輸出業者が多年營々として努力し、幾多の犠牲を払ひ漸く開拓せる各種雜貨市場を巨資の利用による手段方法を選ばず、これを奪取するなどの事実頻々たる。（『雜貨貿易業者挙つて三井糾弾・決議文』『大阪毎日新聞』1936.04.21）
- 農会は過去何十年間營々としてこれらの農産物の販売斡旋に当って来た、否、単に販売斡旋に当って来たばかりではなく、これが生産指導に努力して来たのである。（『産組と農会对立・実情を直視してほしい』『読売新聞』1936.09.03）
- 目睫に迫るシンガポール陥落を契機として過去七十年間營々として築き上げられたマレー英国勢力は根こそぎに駆逐されるであろう。（『マレーの課題・華僑の処理』『東京日日新聞』1942.02.01）
- 私は帝銀事件の犯人などにも、同様な家族的掩護があるのじゃないかと考える。たとえば五十年營々と零細な貯蓄をして老後の安穩を願っていた人とか、親ゆずりの多少の家産でともかく今日まで平和であった平凡な家庭などで、（坂口安吾『ヤミ論語』「家族共犯の流行」1948年）



上記の諸例いずれもからも、「営々」が〈期間中に根気強く、こつこつと何かに打ち込む〉という文脈に使用されていることが見て取れる。この時期から、「営々」に時間の継続性の意味が附随するようになったのであろう。

### 三-4 「営々」の形態変化

○瓜哇人が、山の天辺まで虎刈頭のやうに営々と耕し尽して、物足らぬ顔もせずケロリとして居るのも、西班牙人と和蘭人の統治の而らしめた点である。（『二千年の歴史に眠る蘭印ジャワの旅』『台湾日日新報』1935.02.18）

下線で示したように、昭和に入ってから、「営々」が「と」を伴って副詞的に使用される傾向が現れ始める。新聞記事だけでなく、小説などの文芸作品にも徐々にその形式が確認できるようになった。例えば、

○だから道化は純粹な休みの時間だ。昨日まで営々と貯め込んだ百万円を、突然バラまいてしまう時である。（坂口安吾『茶番に寄せて』1939年）

○こんなものである現実に飽かず何故人間は営々と努力しているか。（宮本百合子『若い娘の倫理』1940年）

などが挙げられる。実際、神戸大学図書館所蔵（データベース）の明治末期（1909年）～第二次大戦中（1945年）までの新聞記事を調査したところ、下記のような結果が得られた<sup>9)</sup>。

①四字熟語の存在（ ）内は用例数。例えば、「孜々営々として」(15)、「孜々営々」(10)、「孜々営々たる」(3)、「孜々営々と」(1)、「孳々営々」(1)、「営々孜々として」(5)、「営々孜々」(2)、「営々役々として」(4)、「営々役々」(3)、「営々汲々として」(1)、「営々汲々とし」(1)、「黙々営々」(2)、「営々辛苦」(6)、「営々辛苦して」(1)、「営々刻苦」(2)、「刻苦営々」(1)、「営々刻苦したる」(1)など、計59例に上り、「営々」だけでは勤勉さなどのニュアンスがまだ伝わりきらない事実の傍証ともなろう。

②「いそしむ」、「奮闘努力」、「専念する」などと共起するものが多数存在する<sup>10)</sup>。

③「営々」のみに関する使用方法にもまだ種々な変化が見られる。例えば、動詞形としての「営々する」(2)、「営々としている」(1)、「営々たり」(2)、「営々たる」(20、うち1例は〈営々たらざる〉の形)、「営々なる」(1)、「営々」のみ(43)、「営々として」(121)「営々と」(10)。全体的に言えば、「営々

9) 文字列「営々」を入力し、全262例がヒットした。うち「経営、営業」のようなものが2例、「□々営々」という判読不能のものが1例あり、それらを除いた259例を対象に分析を行った。

10) 具体例は以下の通り。

○炎熱のもと営々として市民は生活にいそしんでいる、（『東亜拠点・新生の素描：贅沢品犯罪は一掃 築く明るい街：食料品も自給自足だ』京城日報 1940.04.11）

○かれらはただ日曜の狩猟、釣魚、囲碁、将棋のほか何等の娯楽機関もなく、赤道直下の酷熱と猖獗するマラリヤと闘いつつ営々として奮闘努力しているのである、（『蘭領ニューギニア紀行・（邦人の優遇方を）』大阪毎日 1940.12.15）

○大東亜戦争以来国民の関心はともすれば南へ南へと向けられがちだが満洲国はあくまで「南の眼は北へと還る」という固い信念の下に営々と縁の下の力持的仕事に専念しているのである、（『大東亜戦下 転換する満洲経済』読売 1942.09.09）

たり」を出発点とする訓読用法から脱却しておらず、副詞的用法としては「営々として」が圧倒的な勢力を持ち、「営々と」はその12分の1弱であった。

以上、三-3および三-4で判明した事実を考え合わせてみれば、昭和初期から「営々」には二つの変化が生じていたことがわかる。一つは時間の継続性というイメージが現れたこと、もう一つは、「と」を伴う副詞的使用法が広がりつつあったことである。なお、調査範囲での「営々と」の初出は次の例である。

- これと戦って捷つ目算と自信を持たなかった東邦松永氏が東上の足固めとして、著々四隣の敵を降して営々と準備工作を進めていた一方、(「電力界の功罪史：動力国策と電気の必要性」(その九) 東上を競う 東邦と日電『国民新聞』1934.11.03)

### 三-5 継続性の発生に伴う主語の変化

これまで、戦前の「営々」の意義変遷及び形式の変化について分析を行ったが、戦後に入ると「営々」の継続性がますます定着し、「として」の漢文訓読調に取って代わり「と」を伴う副詞的用法が広く使用されるようになった。たとえば、国会会議録 1947.01.01~1957.01.01までの使用例を調査すると、「営々として」224件に対し「営々と」は34件であったのが、1997.01.02~2007.01.01の期間においては、「営々として」170件に対し「営々と」361件と逆転している。

そして、「継続性」という意味の発生と「と」を伴う文法面における副詞的用法の定着とが相まった結果、現在では次のようなものが頻出するようになったのである。

- 古代エジプトの栄光は、古くから営々と語り継がれてきたのではない。(「[コーヒープレーク] よみがえる古代エジプト」毎日東京朝刊 1995.06.19)

- 営々と静かに時が流れ、現代に至るまでの私たちの心のふるさとは、わが日本の家ではないかと改めて思うのです。(「失われていく日本の美と文化、そして家」asahi.com住まい 2004.05.17)

ここでは、「営々と」の主語が「栄光」と「時」であり、述語が「語り継がれ」と「流れ」となっている。いずれも、「努力」や「根性強く」といったイメージとは関連性を持たず、ただ継続する時間の長さを強調しているだけの役割しか果たしていないように思われる。

上記のように、副詞「営々と」の意味から〈継続性〉だけが抽出され、それが一人歩きするようになった結果、下記のようなマイナス評価の文脈にも使用されるに至った。

- このままではずっと借入れ、借金が営々と続くのではないか、(衆議院建設委員会14号・1998.05.22)
- ここでも注意したいのは、「営々と」の主語が前掲二例と同じく人間以外であることである。次に掲げるのは、国会でいつまでも同じ答弁を繰り返す議員を批判する発言である。

- 勉強したらやっていただけというふうに私は理解させていただきます。それは勉強中と営々と続くのじゃなくて、近い将来に具体的な対応がなされるというふうに判断させていただきます。(参議員農林水産委員会14号 1984.04.26)

この主語もやはり人間ではなく、おそらく「答弁」であろう。

このように、「営々と」が「続く」と直接共起して人間以外のものが主語の役割を担うものは、国会

答弁や各新聞において頻出するようになる<sup>11)</sup>。それらは、

- 昨年の一連の事件に引き続き、今回またしても逮捕劇が行われたことを見ると、今日の政官業の癒着による腐敗事件を営々と紡ぎ出す政治・行政システムの抜本改革こそ、衆議院として真剣に取り組むべき課題であると考えます。（衆議院運営委員会15号・2003.03.07）
- 最後に、談合の問題でございますけれども、本当に談合をなくすというのは大変なことだと思います。営々と続いてきたものを根絶するというのは本当に勇気が要る大変な仕事だというふうに思いますけれども、（衆議院国土交通委員会2号 2006.02.24）
- 退職していったら何も処罰も受けない。だから営々と続いたわけでしょう、この官製談合が。（衆議院安全保障委員会4号 2006.11.02）
- また、さっき教育は市場原理じゃないんだという、それも本当だし、じゃ、市場原理じゃないんだって、営々と何もやらないものが続いていっていいのかということも一つあると思うんです。（参議院文教科学委員会19号 2007.06.14）

といった近年におけるマイナス評価の文脈での使用が見られる一方、

- 矢板の列に囲まれた水田跡が見つかった時は「日本の歴史は営々と続いている」と肌で感じましたね。（「[この人と] 前明治大学教授・大塚初重さん／3各地に渡来系の足跡」毎日東京夕刊 1997.04.24）
- ところがこの墓に対する祭祀は、吉野ケ里の集落が消滅する3世紀まで400年にわたり営々と続くのである。（「[女と神の古代]」毎日新聞東京朝刊 1998.05.03）
- 「大事にしなければいけないもの、普遍的なものがある。家が営々と続いたのはきっとそんなものがあったからだろう」と思う。（「[神々の降りる時] 御柱祭」毎日地方版／長野 1998.05.21）
- 山本利樹プロデューサーは「時代や国を越えて、歩き、祈るという単純な行為がなぜ営々と続くのか。その一端は映し出せたと思う」と話している。（「[テレビ] 毎日放送の開局50周年番組「巡礼・世界の聖地」」毎日大阪夕刊 2001.05.12）
- 日は昇り、また沈み、人々の暮らしは営々と続く。（「[さよなら2001] 来年こそは明るい未来を＝静岡」読売東京朝刊 2001.12.31）
- 皇室が営々と続いてきたのは、国民が象徴天皇をよく理解し、天皇も国民のためをよく考えてこられたからだと思う。（「[談論]「女性天皇」どう見る」読売東京朝刊 2005.06.14）
- 五十嵐氏は31日夜の個人演説会で、「合併は、町立三川中学校の改築問題一つだけではない。子や

11) もっとも、「営々として」にも、〈長い期間〉を示す表現と共起し、マイナスの文脈に使用される用例も少数ながら存在する。

○大臣ね、二十五歳から七年間、営々として月給の二割取られてですよ、それが終わったと思ったら、今度は定年終わる五十七歳まで、今度は三割近くを返済にずっと充てなきゃならない、一生が家の支払いですよ。（参議院社会労働委員会6号 1978.04.06）

○あの石油ショックの後の売り惜しみ、買い占めで商社がたたかれて、商社商法もうちょっとまじめにやれという話の中で、日本貿易会等が商社行動基準をつくられる。（中略）にもかかわらず、営々としてこういう商法がずっとまかり通っておる。（衆議院予算委員会19号 1979.03.05）

ただし90年代以降の資料には、このような例を見出しがたい。

孫へと営々と影響が続く。5年後、10年後に社会に変化があっても軟着陸できるようにするため、合併が必要だと強調した。(「三川町長選 合併争点、関心高まる 個人演説会に人だかり＝山形」読売東京朝刊 2006.11.02)

のほか、「文化」、「精神」、「生活」といった伝統や精神面にかかわる主語を伴うものも数多く確認される。したがって、「営々」はマイナス的評価の文脈であれ、プラス的評価の文脈であれ、とにかくある種のモノが長い期間にわたって存続しているという語義を保有するようになっていくことが看取されるのである。

#### 四 「永々」との関わり

「営営」に〈時間的連続性〉が認められるとすれば、同じく漢語出自の「永々<sup>えいえい</sup>」との関わりが問題となるだろう。本節では、「営々」と「永々」の相関関係に目を向け、「永々」が「営々」に吸収されていくプロセスを追ってみたい。

##### 四-1 現代日本語における「永々」の使用状況

次に掲げる諸例では、「永々（と）」が使用されているが、これらは前節に掲げた「営々と」の意味用法と極めて近い意味用法のものである。

- 巨大なメトロノームは、永々と続く人類の歴史を刻み続ける。(「[美術]「美術とメッセージ」展」毎日東京夕刊 1991.05.21)
- 少年はいつか父親になり、また子供に狩りを教えるのだろう。密林の生活は永々と続く。(「[憂楽帳] 密林の少年」毎日大阪夕刊 1996.03.04)
- 東北の各地で厳しくも豊かに、たくましく暮らしを営み、次代へと永々と、文化を守り育ててきた私たちの先輩へ思いをはせるとき、(「私もひとこと／宮城」朝日朝刊 1996.11.09)
- 雪の深い村で永々と続けられてきた伝統行事だ。(「お知らせ・万華鏡」朝日岐阜朝刊 1999.03.09)
- 光は閉ざされ、かつての杉おけに代わって大型ハウロウタンクの中で、酒が永々と醸されている。(「[建築懐古録] 小山酒造」読売東京朝刊 1990.10.01)
- 戦争はつねに愚かしく無意味なものだが、世界史の伝える多くの戦争のなかで三十年戦争は、もっとも愚かしく無意味だった戦争にちがいない。おそらく、あまりに愚かしく無意味だったからこそ、あれほど永々とつづいたのだろう。(「[[ドイツ宝さがし] 阿呆物語「30年戦争」映し出す四部作」読売 2000.01.30)

これらの例における「永々」の主体は「生活」や「伝統行事」などが主たるもので、いつまでも続くという描写となっている。

しかし、例えば『読売新聞』における過去20年の用例を調査したところ、「永々（永）」の使用例は11件で、「営々」の397件の4%にも満たないと同時に、これらの例にはほとんど振り仮名がなく、読み方の定かでないものも少なくない。なお、1947.11～2007.11現在までの60年にわたる「国会会議録」を検索したところ、全部で6件（「永永」は1953年、「永々」はそれぞれ1948、1951、1970、1991、2001年）

見られるのみで、極めて少数であった。これは、前掲の『読売新聞』における使用状況と類似している。そのほか、後にも触れるが、「永々」は現行国語辞書の中では中型以上のものに登録されるのみで小型辞書には見られず、やや特殊な用語となっているのが現状と言えよう。

#### 四-2 「永々」と「嘗々」の交替

前節では、現代日本語における「永々」と「嘗々」の類似性について論証する傍ら、前者の使用頻度・周知度の低さについても言及した。しかし、少なくとも日本近世までの文献においては、「永々」はある程度広く使用されていたようである。

「永永」は中国語に典拠のある漢語で、次のように古代以来の例が認められる。

○祖宗之功德，著於竹帛，施於万世永永無窮。（『史記』孝文帝本紀）

○養寿之士先病服藥，養世之君先乱任賢，是以身常安，而国永永也。（『潜夫論』「思賢」第八（東漢））

○使永永年代，服我成烈。（韓愈『潮州刺史謝上表』）

○故審六藝之指，則天人之理可得而和，草木昆蟲可得而育，此永永不易之道也。（『文心彫龍義徵』卷一・徵聖・第二・三・一）

○一備百費。至簡易。可久大永永與天地無極。（賀長齡『皇朝經世文編』卷四十八・戸政二十三・漕運下）

この語は日本にも早くから受容され、次のような例を見ることができる。

○周置採詩官。八百之祚永永。（『本朝文粹』七・大江匡衡「返送貞観政要」）

のような漢文文献のほか、中世以降も次のような例がある。

○未来永々の楽しみはかつかつ心を養ふとも。（『日蓮遺文』「持妙法華問答鈔」）

○於此遺財者，留置寺家，未来永々欲備彼尼本尊仏聖灯油。（『撰津勝尾寺文書』卷九・寛元4年10月某日分〔日付不明〕）

○桓武ノ聖代（中略），百王萬代ノ宝祚ヲ修シ置レシ勝地ナレバ，後五百歳未来永々ニ至ルマデ，荒廢非ジトコソ覚ツルニ，（『太平記』卷三「八幡合戦事付官軍夜討ノ事」）

○世に大名の御知行，百貳拾万石を五百石どり，釈迦如来御入滅此かた，今に永々勘定したて見るに，之を取つくさじといへり。（『日本永代蔵』卷一「浪風静神通丸」）

中世日本語における「永永」は、「ある事態が期限を定めることなく永久に続くこと。「やうやう」（時代別日本国語大辞典室町時代編）という意味で、「文書語」（『日葡辞書』）と認識されていたようである。

また、呉音の「ヨウヨウ（ヤウヤウ）」は、「未来永々」，「不退永永」<sup>12)</sup>といった形で宗教関係の書物に現れている<sup>13)</sup>。

一方「永々」はまた、和語「ながなが」の漢字表記としても使用されていた形跡がある。

○龍宮永々罷りました（定之）ぜぜ貝つなき送りまいらせ。（松尾芭蕉俳諧・高政編『ほのぼの立』1678年）

12) たとえば『ぎやどべかどる』（1599）上・二・一二に、「不退永永の事に対して一期は死すべき望みにたへかね」とある。

13) たとえば『鎌倉遺文』に確認できた正治元年（1199）～応長二年（1312）までの17例は、例外なく寺院関係の文書であった。

○西国より上り、海上<sup>ながなが</sup>永々かかり… (咄本『軽口露がはなし』巻三・一一、17世紀末～18世紀初)

周知のように、「ながなが(し)」という和語表現は古くから存在し、

○<sup>あしひきの</sup>足日木乃 <sup>やまどりのをの</sup>山鳥之尾乃、<sup>しだりをの</sup>四垂尾乃 <sup>ながながしよを</sup>長永夜乎 <sup>ひとりかもねむ</sup>一鴨将宿 (『万葉集』巻一一・二八〇二)

○楼のそばにもかかる反橋をしたり。〈中略〉ながながとつくられたり。水はながながと下より流れまひて楼をめぐりたり (『宇津保物語』楼上・上)

○犬のもろ声にながながとなきあげたる、まがまがしくさへ憎し (『枕草子』にくきもの)

のように、〈時間的、空間的に長いさま〉という客観的な意味と同時に、〈必要以上に長く感じられる〉という主観的・評価的な側面をも含意することばである。

漢語「永永(エイエイ)」と和語「ながなが」とは、文体の異なる類義語として併存したが、時代が下るにつれ、「永永」は衰退し、「ながなが」が定着するようになっていったものと見られる。たとえば、慶応年間(1867年)に編纂され、明治前期に再版(1872年)、三版(1886年)が出された『和英語林集成』には、「エイエイ」と「ながなが」について次のような記載の変遷が見られる。

○Yei-Yei, エイエイ, 永永. (*naga naga*). *adv.* Forever, ever, perpetually, always. Syn. ITSZMADEMO, NAGAKU.

NAGA-NAGA, naganaga, 長長, *adv.* Very long. — *no biyōki*, a very long sickness.

(初版, 再版同)

○Eiei エイエイ 永永 (*naga naga*). *adv.* Forever; ever; perpetually; always. Syn. ITSZMADEMO, NAGAKU.

NAGA-NAGA, naganaga, 長長, *adv.* a long time, very long. — *no biyōki*, a very long sickness.

Syn. HISASHIKU. (三版)

三版の「ながなが」には「a long time」の語釈が加えられ、類語も「NAGAKU」から「HISASHIKU」に変わっているが、基本的な解釈と用例は変わっていない。一方、漢字表記は初版の「永永」から、二版・三版では「長長」に変わっていることが注目される。さらに、例文が「ながなが」の項にのみあって「エイエイ」の項にはないことにも注意すべきであろう。すなわち、「エイエイ」は知識としては存在していただろうが、実際多く使用されていたのは「ながなが」のほうであったことが想起されるのである。これは、以下に掲げる辞書、文学作品および新聞記事によっても明らかなどころである。

たとえば、明治中期の『和英対訳いろは字典』(増補訂正第二版 1887年)や『和英語林集成』を継承するブリックリー他『和英大辞典』(1897年)には、「ながなが」(長長)とともに、「エイエイ」(永永)も収録されていたが、嶋田三郎校訂・市川義夫纂訳『英和和英字彙大全』(1885年)、高橋五郎『和漢いろは辞典』(1889年)、佐久間信恭『和英大辞林』(1909年)、『武信和英大辞典』(1919年)、『井上和英大辞典』(1920年)、竹原常太『スタンダード和英大辞典』(1924年)、齋藤秀三郎『齋藤和英大辞典』(1928年)など、明治中後期から昭和初期にかけての主な和英辞典には収録されていない。この和英辞書への未収録状況は現在に至っている。また、明治期の漢語辞書や『辞林』(改訂23版 1911年)などの国語辞書にも掲げられておらず、そのかわり、「ながなが」はすべての辞書に挙げられていた。なお、「ながなが」の漢字表記には「長長」が優先的に採られ、「永永」を併記する場合でも「長長」が先に示されている。戦後に入ってから、『岩波国語辞典』(初版～六版)、『新明解国語辞典』(初版～六版)などの代表的な小型国

語辞書には音読みの「永永<sup>えいえい</sup>」が全く収録されず、「ながなが」も「長長」の表記のみになっている。もっとも、『広辞苑』（初版1950年～六版2008年）や、『大辞泉』（1998年）、『大辞林』（初版 1995年～三版2006年）をはじめとする中型国語辞書には相変わらず「永永<sup>えいえい</sup>」が見出しとして挙げられている。ただし、「ながなが」の漢字表記は小型辞書と同じく、「長長」のみとなっている。

なお、管見例における「永永（永々）」には必ずしも振り仮名がついているわけではないので、読み方を判別しがたいものもあるが、ルビの付された例については「ながなが」のほうが圧倒的に多かった。たとえば、『太陽コーパス』の検索によって得られた「永々」は7例あるが、そのうち読みの明確なものは次の「ながなが」2例のみである。

○元<sup>もと</sup>の媒酌人へ渡り<sup>つるきち</sup>鶴吉<sup>めと</sup>を嫁り<sup>なが</sup>永々<sup>ふうふう</sup>夫婦たるべき様<sup>やう</sup>理解<sup>きけ</sup>申聞られよ（糸野採菊「涙の媒介」『太陽』1895年06号）

○『そこです。だから私は唯今<sup>わたし たごいま</sup>つまらない夢<sup>ゆめ</sup>のやうなことを永々<sup>なが</sup>と申し上げたのです。（里見弴「失はれた原稿」『太陽』1917年01号）

また、神戸大学所蔵の昭和前期までの新聞記事（データベース）調査によっても、「永々」が僅か18例（「永々株<sup>えい かぶ</sup>」の例を除く）しかなく、そのうち明確に「エイエイ」の発音注記がなされているのは、次の例のみである。

○価格<sup>かかく</sup>の昂騰<sup>かうとう</sup>は決して一時的<sup>けつ</sup>現象<sup>じてきげんしやう</sup>にあらず<sup>江い</sup>永々<sup>わが</sup>我<sup>たう</sup>当業者<sup>げふしや</sup>の苦痛<sup>くつう</sup>たらずんば<sup>あら</sup>非ず。（「閑却せられたる松脂工業」『京城日報』1919.05.25）

残り17例のうち6例には振り仮名がなくどちらとも判断しがたいが、他の11例には次のように「ながなが」の読みが付されている。

○本日<sup>ほんじつ</sup>の会合<sup>くわいがふ</sup>は当社<sup>たうしや</sup>の整理<sup>せいり</sup>に就<sup>つ</sup>きて委員<sup>ゐんしん</sup>諸氏<sup>しよし</sup>が永々<sup>なが</sup>奔走<sup>ほんそう</sup>されたる結果<sup>けつこわい</sup>愈々<sup>よ</sup>具体的<sup>ぐたいてき</sup>の整理案<sup>せいりあん</sup>を見る<sup>み</sup>に至<sup>いた</sup>り（後略）（「炭坑大株主会・整理の経過報告炭山爆発の説明」『東京時事新報』1913.01.16）

○（炭坑の試掘採掘は）欧米<sup>おうべい</sup>の例<sup>れい</sup>に見る<sup>み</sup>が如<sup>ごと</sup>く一時<sup>じ</sup>の現象<sup>げんしやう</sup>に過ぎ<sup>す</sup>ずして永々<sup>なが</sup>持続<sup>ぢぞく</sup>す可<sup>べ</sup>きもの<sup>あら</sup>に非<sup>あら</sup>ざる。（「九州鉱業の活躍」『福岡日日新聞』1913.02.06）

○総督府<sup>そうとくふ</sup>では「お前達<sup>まへたち</sup>もトラスト<sup>せいぼつ</sup>征伐<sup>さんぎやふかい</sup>のため永々<sup>なが</sup>御苦勞<sup>ごくろう</sup>で有<sup>あ</sup>たがサア<sup>これ</sup>是<sup>これ</sup>からはウンと儲<sup>まう</sup>てお呉<sup>くれ</sup>」と云<sup>い</sup>うて昨年<sup>さくねん</sup>七月<sup>しちがつ</sup>一日<sup>いちにち</sup>より既設<sup>れいせつ</sup>煙草業者<sup>えんそうしやう</sup>には願<sup>ねが</sup>ってもない煙草税<sup>えんそうぜい</sup>令<sup>れい</sup>と云<sup>い</sup>う軌条<sup>きじょう</sup>を敷<sup>敷</sup>いて下<sup>くだ</sup>さった。（「日本種煙草の発達 十」『京城日報』1915.05.11）

○処<sup>ところ</sup>があともう十年<sup>じゅうねん</sup>あまりもすると関東州<sup>くわんとうしゅう</sup>は支那<sup>しな</sup>へ、永々<sup>なが</sup>拝借<sup>はいしやく</sup>して有<sup>あ</sup>難<sup>がた</sup>う御座<sup>ござ</sup>いました、とい<sup>い</sup>って還<sup>くわむぶ</sup>附<sup>ふ</sup>せねばならないこと<sup>こと</sup>にな<sup>な</sup>って居<sup>ゐ</sup>る。（「満州米の生産増加」『満州日報』1931.10.26）

このほか、「永々」を「ながなが」と読ませる例は、

○文治「いや永々<sup>なが</sup>御心配<sup>ごしんぱい</sup>をかけまして有<sup>あ</sup>難<sup>がた</sup>う存<sup>ぞん</sup>じます、何<sup>なん</sup>から申<sup>まを</sup>して宜<sup>よろ</sup>しいやら、何<sup>なん</sup>うも江戸<sup>えど</sup>を經<sup>た</sup>つて後<sup>のち</sup>はさまざま難儀<sup>なんぎ</sup>に逢<sup>あ</sup>いました」（三遊亭圓朝『後の業平文治』四十一、1903年）

○「永々<sup>なが</sup>御世話<sup>ごせわ</sup>になりました。残念<sup>ざんねん</sup>ですが、どうも仕方<sup>しほう</sup>がありません。もう当分<sup>たうぶん</sup>御眼<sup>ごがん</sup>にかかる折<sup>せ</sup>もございますまいから、随分<sup>じぶん</sup>御機嫌<sup>ごきげん</sup>よう」と宜道<sup>あいだう</sup>に挨拶<sup>あいさつ</sup>をした。（夏目漱石『門』1910年）

○「永々<sup>なが</sup>御本<sup>ごほん</sup>を難<sup>がた</sup>有<sup>あ</sup>う。」（芥川龍之介『魔術』1919年）

○予<sup>よ</sup>が報国<sup>ほうこく</sup>の微衷<sup>ゐしゆう</sup>もて永々<sup>なが</sup>紀州<sup>きしゅう</sup>のこの田舎<sup>でんが</sup>で非常<sup>ひじょう</sup>の不便<sup>びふん</sup>を忍<sup>しの</sup>び身命<sup>みんめい</sup>を賭<sup>た</sup>して生物調査<sup>せいぶつたうさ</sup>を為<sup>な</sup>し、（南方熊楠『十二支考・2 兎に関する民俗と伝説』1915年）

○幕府は老中罷免<sup>ひめん</sup>に対する反抗の意志<sup>じょうそ</sup>を上疏<sup>じょうそ</sup>の手段に表白したばかりでなく、その鋒先<sup>ほこさき</sup>を「永々在京<sup>ながなが</sup>、事務にも通じた」というところの慶喜に向けた。(島崎藤村『夜明け前』第一部下 1936年)

○「はい。では、引揚げましょう。永々と御配慮<sup>ごはいりょ</sup>ありがとうございました」(海野十三『毒瓦斯発明官 — 金博士シリーズ』1941年)

のように見られるが、逆に「エイエイ」の例は認められなかった。

このように、明治末期から昭和前期にかけて、文字列「永々」に対しては「ながなが」という訓読みが一般的であり、「エイエイ」という音読例がほとんど見られなくなったようである。そして、「永々」音読の衰退とほぼ同時期に、「営々」の使用例が大量に認められ、国語辞書の収録例に象徴されるように、あたかも、「永々」<sup>エイエイ</sup>に取って代わるかのように、「営々」<sup>エイエイ</sup>が一般の国語辞書に登場する程度にまで拡張を成し遂げたのである。さらに、「永々」および「ながなが」の持つ〈必要以上に長く感じる〉というニュアンスまで「営々」に認められる現象さえ存在する。たとえば、「永々夫婦<sup>なが ふうふ</sup>たるべき」(条野採菊『涙の媒介』[前掲])に対する、「夫婦も営々と続かない」(ドラマ「婚外恋愛」読売東京夕刊2002.02.04)という表現もあり、「永々と陳述した」(寺田虎彦『議会の風景』)に対応する、「営々とおっしゃいますね。」(参議院環境委員会2号・2006.02.03)のような例をあげることができる。

しかし「営々」<sup>エイエイ</sup>の場合、多くの国語辞書における記載は旧来の意味である「あくせく働く」か「熱心に働く」かのどちらかに終始しており、この状況は現在でも変わっていない。そのためか、「永々」<sup>エイエイ</sup>が「営々」<sup>エイエイ</sup>に取って代わられたという可能性について、これまでほとんど注目されなかったのである。この交替現象には、両者の発音の一致という要因<sup>14)</sup>以外に、もう一つの重大な要素として、大正以降の「営々」<sup>エイエイ</sup>に見られる〈時間の継続〉という意の生成があると考えてよいだろう。

ところで、これまで考察したように、「営々」は本来の〈(蠅が)飛び回るさま〉から〈往来するさま〉に変わり、さらに、〈あちらこちらで讒言する〉または〈私利私益ばかりを追いかける〉というマイナス評価を含むようになった。そこからまた〈せわしく動きまわるさま〉の意だけが定着して、〈何かのために一生懸命働く〉というプラス評価の意味に転じたと考えられる。また、この〈一生懸命働く〉意には必然的に〈期間の長さ〉のニュアンスが随伴するが、その〈期間の長さ〉の意が次第に中心的意味となるにつれて、再びマイナス評価の用法が見られるようになったのである。

なお、「営々」のように、表現の対象が〈具体的な様態〉から〈時間の持続〉に変わるのとちょうど逆の経緯を経たと考えられるものとして、「ふんだん」という語があげられる。「ふんだん」は〈時間の持続〉を表す「不断」の変化した形で、「惜しげもなく使われる量の多さ」の意味に変わっている<sup>15)</sup>。

14) 意味変化の結果生じた同音による書き換えに関しては、阪倉篤義『日本語の語源』(講談社 1978年)に「勝事」から「笑止」に変化した例が掲げられている(pp.122-126)。また、陳力衛「「文盲」考 — 「蚊虻」との関係を中心に —」(『日本近代語研究1』ひつじ書房 1991年)においては「文盲」と「蚊虻」の同音による交替について分析が行われている。なお、同音ではないものの、音が酷似しているため入れ替わってしまったものに、遠藤仁「「愚痴」の語史」(『国語学研究』33, 1994年)で言及された「愚痴」と「無知」が挙げられよう。

15) 渡辺実『日本語史要説』(岩波書店 1997年)第三章「発音の軽化」(p.85)参照。



## おわりに

本稿では、漢語副詞「営々」をめぐって、「永々」との相関関係を目を配りつつ考察した。前稿の「黙々」<sup>16)</sup>と結びつけて考えた場合、豊語形漢語副詞に見られるパターンとして、まずは、漢文訓読調の「—として」から変化し、「と」のみを伴って副詞としての機能を保有するようになり、その後常用語化して種々の文章や文脈に用いられるようになる中で、次第に語義変化が生じていくということが考えられるのである。

こういった在来漢語の日本語における独自の意義変遷というのは、気付かれずに絶えず発生しているものであり、「黙々と話す」、「営々と続く」の如きものは、しばしば、誤用と受け取られることすらある。これらについては、可能な範囲内で、一つ一つ正確に検証して把握していく必要がある。

一方、大航海時代以降、言語をテーマとした文化交渉というディシプリンに於いて、日中間だけで言えば、所謂訳語、即ち西洋言語から日・中言語への翻訳が注目されてきた。また西洋言語を参照指数として、日中間の言語本質の差異を抽出するという試みも絶えず行われている。但し、それらはほとんど西洋語からの訳語を研究対象としたものであり、その際には和英辞典がしばしば利用されているが、今回取り上げた「営々」のような在来漢語の語義変化を考察する場合にも、和英辞典類の活用が大いに有効である。仮に〈中心〉と〈周縁〉の関係に譬えることが許されるのであれば、日本語或いは中国語にまつわる言語事象が〈中心〉であるのに対し、和英辞典類はそれを観察する“窓”としての〈周縁〉的な存在であるように思われる。ところが、この〈周縁〉があったからこそ、〈中心〉に起きている意義変遷の具体的な内容や時代がより明白に見えてくる。今回扱った「営々」のほかにも、例えば、「若干」が『和英語林集成』の初版（慶応三〈1867〉年）における“much”, “many”という解釈から、再版（明治五〈1872〉年）と三版（明治十九〈1886〉年）での“some”の増補を経て、『袖珍コンサイス和英辞典』（大正十二〈1923〉年）の“a little”に変わるなどの例も挙げられる。

今後、西洋語に基づく訳語のみならず、在来漢語の語義変遷というテーマを中心に挙げつつ、和英辞書類の記述に焦点を当て、研究を深めていきたいと考える。

16) 拙稿「「黙々と」の意義変遷」（『国語国文』76-3, 2007.3）